

平成 28 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「次世代へ繋ぐ土砂災害の恐ろしさ」

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 2年 ^{すずき しゅうか}鈴木 秀香

今年も行われた「水天宮神輿祭り。」私が住んでいる一関市では、毎年夏祭りの一貫として水天宮神輿祭りが開催される。水天宮とは、磐井川という広い川に面した小さな通りのことである。男達の威勢のいいかけ声と、力強い太鼓の音とは対照的に、この祭りの裏には悲惨な事実があった。これは、私の祖母の話である。

昭和 22 年、23 年の 9 月、カスリン台風とアイオン台風が一関市を襲った。このうちのアイオン台風は、甚大な被害をもたらした。

当時、祖母は中学 2 年生だった。昭和 23 年 9 月 16 日、ゴー、ゴー、という地響きのような音が何時間も鳴り続いた。母に、「外へ出てはだめ。」と言われ、不安な気持ちで窓の外を眺めていたという。

雨が激しさを増してきた頃だった。祖母は目を疑った。通学路が、茶色く濁った川のようにになっていた。漬け物樽、たんす、着物、家屋が浮き沈みを繰り返しながら目の前を通り過ぎていく。そして、山では地すべりが起き、一気に土砂や木々を押して鉄砲水となった。堤防を軽々と突き破り、ブラックホールのようにたくさんの家屋から人まで吸い込んでいった。

啞然としている祖母の前を、「助けてけろー。」と叫びながら土砂に飲み込まれていく人がいた。助けたくても助けられなかった。祖母の耳には、今もその声が聞こえてくる気がするそうだ。悔しかったと静かに語った。

雨がやんだ後、地元の中学生在が遺体やがれきの片付けをした。2 つの台風による死者・行方不明者は、約 700 人に上り、全壊家屋は約 540 戸に上った。ダムがなかったため、川周辺に住宅があった人、また山の近くに家があった人は、鉄砲水や土砂に飲み込まれて亡くなった。当時は物がなかったので、バケツで水をくみ、家に入った泥水を捨てていた。ボランティアもいなかったのも、小屋での生活を余儀無くされたそうだ。

この話をしみじみと語った祖母の目は潤んでいた。奇跡的に家は残ったものの、間近で命が終わる光景を 14 歳で目にするのは相当な心の傷を負うことになっただろう。もし、私が祖母のような体験をしたら、立ち直るのに苦労したかもしれない。

東日本大震災の時、私は 8 歳だった。経験したこともない揺れとともに、山では地すべりが起こった。学校では避難訓練と同じルートで避難し、家ではラジオを頼りに生活した。私の心の中は不安でいっぱい、夜も眠れなかった。

私の体験と祖母の体験で大きく異なることは 3 つある。1 つ目は、情報の発達である。今の時代はテレビ、新聞、ラジオなどの情報技術が著しく発達している。しかし、昭和の半ばは、これらの普及率が低かった。これにより避難が遅れ、救えたはずの命を失ってしまったのである。正確な情報を素早く得る力が求められていると考える。2 つ目は、防災への関心意欲が高まってきていることである。今では、全国の学校や施設で防災訓練が行われている。だが、特に小・中学生は訓練だからと言って不真面目に行う様子が見られる。私も最初はそうだった。しかし、訓練がいざという時に役に立つことを痛感したので、今後は自分も他の生徒も真剣に取り組むように呼びかけをして、訓練の重要性を伝えたい。3 つ目はボランティア活動の活発化だ。昔は交通の便が悪かったり、情報が伝わりにくかったりしたので、自分達で全て復興させる必要があった。しかし今は、たくさんの都道府県から愛がこもった義援金やボランティアの方が被災地へ来るようになった。そのおかげで、一刻も早い復興が可能になってきた。私も小学校の頃、募金活動をしたことがあるので、これからも心の傷を負った方々へ優しさを届けていきたい。

昭和半ばに一関市を襲った二つの台風の恐ろしさを後世へ残すため、至る所に危険地帯を示す看板が立っている。また、土砂災害を防止するための砂防堰堤が築かれた。これを見る度に、私は祖母の話を思い出すことができる。そして、町の人々が先人達の体験を教訓としていることが感じられる。そこには、同じ過ちを繰り返さないと誓った市民の思いが込められていると実感した。

私も防災に対する気持ちが悲惨な事実を知り、変わった。まずは、家族と逃げ場所の確認をする。連絡手段や避難場所へのルートを決め、ハザードマップを作りたい。そして、日頃から逃げる準備をし、早めに危険か判断することを念頭に置いて生活したい。

初めに述べた水天宮祭りとは、台風による土砂崩れや洪水によって犠牲になった方を追悼するためのものである。過去から目をそらさず、次世代へ語り継いでいきたい。